

平成22年度病害虫発生予察特殊報第3号

平成23年 1月11日
栃木県農業環境指導センター

トルコギキョウ葉巻病

1 病原ウイルス：トマト黄化葉巻ウイルス

Tomato yellow leaf curl virus ; TYLCV

2 作物名：トルコギキョウ

3 発生経過

平成22年12月、県南部で栽培されているトルコギキョウにおいて、草丈の伸びが悪く、生長点部の葉巻症状を呈する株が見つかった。この株を採取し、農業試験場病理昆虫研究室及び農業環境指導センターにおいてPCR法によるウイルス検定を行ったところ、TYLCVが検出され、トルコギキョウ葉巻病であることが確認された。

なお、本病害は平成11年に長崎県で初めて確認され、国内では計14県で発生確認されている。関東では千葉、茨城、群馬及び埼玉県に次いででの発生となる。

4 病徴

病徴は、発病部位より上は節間が短縮し、萎縮する。葉は小型化し、葉脈が隆起し葉表を内側にして巻葉する（図1、2）。



図1 トルコギキョウ葉巻病の発病株



図2 葉脈の隆起症状

5 病原ウイルスの性質及び伝染

本ウイルスは、タバココナジラミによって伝搬される。成虫、幼虫ともに罹病株を吸汁することで保毒し、1～3日の潜伏期間を経て、ウイルスを伝搬する能力を有する。伝染は永続的に行われるが、経卵伝染はしない。また、種子伝染、土壌伝染、汁液伝染はしない。

6 感染植物

感染が確認されている植物は、ナス科（トマト、タバコ、チョウセンアサガオ、ペチュニア等）、リンドウ科（トルコギキョウ）、キク科（ヒャクニチソウ、ノゲシ等）、トウダイグサ科（エノキグサ等）、マメ科（インゲンマメ、ヒラマメ）、アオイ科（ウサギアオイ）、ナデシコ科（ウシハコベ）などである。また、病徴は、トマト、チョウセンアサガオ、ペチュニア、トルコギキョウ、インゲンマメなどで確認されている。

7 防除対策

- (1) ほ場内及びほ場周辺の除草を行い、タバココナジラミの生息場所を根絶する。
- (2) 施設開口部に目合0.4mm以下の防虫ネットを張り、タバココナジラミの侵入を防ぐ。また、近紫外線カットフィルムの利用や黄色粘着板の設置も有効である。
- (3) ウイルス感染苗の持込みを防ぐため、苗の購入等には十分な注意が必要であり、感染が疑われる苗は定植しない。
- (4) 特に定植時から生育初期の感染は大きな被害につながるため、初期からタバココナジラミの防除対策を徹底する。
- (5) 発病した株は速やかに抜き取り、埋設やビニル袋等で密封し枯死させてから処理する。
- (6) 施設栽培では、収穫終了後に全ての株を地際から切断し、蒸し込み処理（40℃以上で10日以上（継続した晴天日3日以上））を行い、残さに寄生しているタバココナジラミを完全に死滅させる。

8 トルコギキョウまたは花き・観葉植物のコナジラミ類に登録のある農薬

（平成23年1月4日現在の登録状況）

系統名	薬剤名	希釈倍率等	使用時期/使用回数
ネオニコチノイド系	アクタラ顆粒水溶剤	2000倍	発生初期/6回以内
	スタークル粒剤	1g/株(但し、10a当り30kgまで)	定植時/1回
	アルバリン粒剤	1g/株(但し、10a当り30kgまで)	定植時/1回
	スタークル顆粒水溶剤	2000倍	発生初期/4回以内
	アルバリン顆粒水溶剤	2000倍	発生初期/4回以内
	ベストガード水溶剤	1000倍	発生初期/4回以内
ピリジンアゾメチン系	チェス顆粒水和剤	5000倍	発生初期/4回以内

- 注 1) 農薬はラベルの表示を確認して正しく使用する。
- 2) スタークル粒剤、アルバリン粒剤、スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤は同じ有効成分（ジノテフラン）なので、成分の総使用回数（5回以内（定植後は4回以内））に注意する。
- 3) 同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

詳しくは農業環境指導センターにお問い合わせください。

TEL 028-626-3086

<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>